

大口不良債権と「追い貸し」の分析

埼玉大学 伊藤 修

現在、不良債権の存在は問題の焦点となっているが、その実像や発生の経過はまだ十分に明らかになっていないように思われる。そこで本報告では、特に代表的な大口不良債権の発生経過とそこにおける銀行の行動を追跡した結果を報告する。

具体的には、流通(小売)・不動産・建設の3業種から、代表的な大口不良債権企業(借入残高が1000億円を超えるに至るような)20社を選び、『年報 系列の研究』を資料として、各社の借入総額とその金融機関別構成(上位10行の融資額とそのシェア)の推移を整理した。採用した時点は、1986年(バブル発生直前)、90年(バブル末期)、93年(バブル崩壊期)、97年(金融危機が明らかになった時期)の4時点である。この作業結果から抽出された主な事実は次のようなものであった。

①借入総額を見ると、20社のうち、バブル期に増加するもの14社、減少するもの6社と分かれるのに対し、最も明瞭なのはバブル崩壊過程の1990～93年における借入の膨張である。その後も多数ケースは増加を続けるが、減少を始める例も7社ある。

②金融機関別に見ると、20のうち16ケースで、経営悪化時におけるメインバンクの救済責任引き受け機能と想定されている現象が確認される。また多くの場合に、メインに次ぐ上位融資行も融資を増加させている。

③このほか少数事例として、メインバンクが逃走したと見られるケース、途中でメインバンクが交代したり2行(2系列)に増えたケース、メインバンクが不明確で責任引き受け機能も見られないケース、メインバンク以外の下位行が明瞭に撤退したケースもあった。

こうして、興味深い例外もあるが、ほとんどのケースで、メインバンクおよび上位融資行がバブル崩壊後に大規模な「追い貸し」を行い、問題を拡大させたと見られる。

金融機関はなぜこのような行動をとったか、またこうして拡大した大口不良債権が金融にいかなる作用を及ぼしたと考えられるかといった含意については、さらに検討が必要であるが、仮説的な問題提起ができれば幸いである。なお、整理したデータの全体は当日配布する予定である。